

令和 2 年 6 月 17 日現在

機関番号：32686

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13772

研究課題名(和文) ザクセンにおける植民地物産市場の形成(18世紀中期～19世紀前半)

研究課題名(英文) Market formation of colonial goods in Saxony from the mid-eighteenth to the beginning of the 19th centuries

研究代表者

菊池 雄太(KIKUCHI, Yuta)

立教大学・経済学部・准教授

研究者番号：00735566

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀から19世紀初頭にかけて進行した大西洋諸地域を結ぶ経済圏の拡大は、経済史における重要テーマであり、また今日のグローバル化した世界を理解する鍵ともなる。本研究は、これまで十分に研究されてこなかった内陸ドイツ地域に着目し、同地域において大西洋植民地物産市場が形成されるプロセスを明らかにした。

具体的には、砂糖やコーヒーなどの植民地物産のザクセン地方における浸透を、価格、交易、商人、市場制度などの観点から分析した。成果は雑誌論文のほか、ドイツ語書籍として発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

18世紀から19世紀初頭には、いわゆる「大西洋経済」の拡大が起こった。これは、大西洋に面した諸地域が経済的に結びつき、ひとつの圏域を形成したことと理解され、現在のグローバル化した世界を理解する上でも重要な現象と考えられてきた。一方で、大西洋に直接は接していない諸地域も、間接的な形でこの経済圏に組み込まれていたことが、近年徐々に注目されている。しかし研究は明らかに不十分であった。本研究では、史料に基づく実証分析を通じて内陸ドイツ地域が大西洋経済圏に強く組み込まれていたことを明らかにした。辺縁的な地域へのグローバル経済の進展を歴史的観点から示したことに意義がある。

研究成果の概要(英文)：The rise of the Atlantic Economy, which ranged from the 18th to the beginning of the 19th centuries, is an important object for the research in economic history and, at the same time, it provides a clue to understand the globalized world of today. This study focused on the inland areas of German territories because economic historians have paid only little attention on them, and revealed the market formation process for the Atlantic colonial goods. More concretely, this study analyzed the spread of colonial goods such as sugar and coffee in Saxony from the perspectives of price, trading, merchants and market institutions. The findings of the research were (and will be) published on journals and as a book in German language.

研究分野：経済史

キーワード：大西洋経済 ドイツ ザクセン ハンブルク 植民地 市場 商人 消費

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

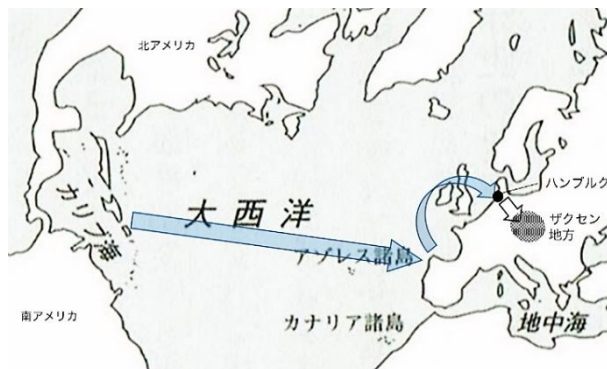
### 1. 研究開始当初の背景

(1) I. ウォーラーステインの近代世界システム論では、西ヨーロッパ中核地域の経済発展の要因として、大西洋経済の発達による新大陸地域の周辺化・従属化が重視される。それに対し P. オブライエンは大西洋経済の意義を限定的にとらえた。近年の研究は、中核・周辺といった区分や経済成長に果たした度合といった観点にとられず、ひとつの歴史的総体として大西洋経済圏を考えようとしている (B. ベイリン『アトランティック・ヒストリー』名古屋大学出版会、2007年)。しかしここで抜け落ちているのは、大西洋地域での商業と後背地市場との接合関係である。大西洋経済の時代とされる18世紀において、大陸ヨーロッパ最大の植民地物産貿易国(とくに砂糖とコーヒー)はフランスであり、その中心的貿易港であるポルドーと北ドイツ貿易港ハンブルクがヨーロッパ大陸内物流の枢軸を成していたことはよく知られる。ところが、ハンブルクに輸入された後の流通過程は、きわめて不明瞭であった。同市の広大な後背地市場の重要性は、古くから多くの経済史家が認識していたが、解決されていなかったのである。

(2) 私は上述のテーマに関し、ハンブルクからドイツ内陸地域への輸出貿易に関する論文を発表し、国際学会で報告し(“Hamburg's overland trade 1630-1806”, 6th International Congress of Maritime History (国際海事史学会), 2012. 7; “Trading in Coastal, Riverside and Rural areas”, XVIIth World Economic History Congress (世界経済史学会), Kyoto, August 2015. 7), ドイツ語博士論文を完成させた。この成果は国際的にも類例がなく、博士論文は国外でも注目された。しかし上述の成果は、ドイツ内陸地域へ向けたハンブルクの輸出貿易の長期的動向を明らかにしたに留まる。植民地物産が流入することによってドイツ内陸地域でどのような変化が生じたのかについては、手つかずのままである。内陸ドイツ地域における植民地物産を扱った数少ない先行研究としては、消費文化史的アプローチをとるものや (C. Hochmuth, Globale Güter - lokale Aneignung, Konstanz 2008), ザクセンの植民地物産流通を論じたものが挙げられる (J. Ludwig, Amerikanische Kolonialwaren in Sachsen 1700-1850, Leipzig 1998)。しかしいずれの研究にも欠けているのが、1. ドイツ最大の港湾都市ハンブルクとの関係、2. 価格や制度といった要素を踏まえた市場形成という観点である。経済史・商業史研究において、これは重大な欠落であった。

### 2. 研究の目的

(1) 以上の研究史的な背景に基づき、本研究では18世紀中頃から19世紀前半のザクセン地方における植民地物産市場の形成をハンブルクとの関係に着目しつつ分析していくことを目的とした。



矢印は植民地物産の流れを示す。

これまでのヨーロッパ経済史研究では、大西洋植民地保有国に関心が集中していた。一方、そのような大西洋経済の「前面部」に周縁的に接した地域は視野に収めきれない。

本研究では、白抜き矢印で表される物流と関連付けながら、網かけ部(ザクセン地方)における植民地物産市場の形成を分析する。

図1: 本研究課題が明らかにしようとする植民地物産の流れと植民地物産市場

ザクセンを対象とするのは、同地方のライプツィヒで開かれた国際大市が中・東欧内陸商業の中心地であり、ハンブルクから輸入される植民地物産の一大集散地と考えられるからである。さらに、内陸物流の動脈であるエルベ川を通じハンブルクと結びついたマクデブルクやドレスデンも、商業中心地・消費市場として重要なザクセン都市である。18世紀中頃から19世紀前半という時代設定は、この時期がヨーロッパ植民地物産貿易の発展期に当たるからである。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究史の整理

近年、国外における大西洋経済史研究は長足の進歩を遂げている。とくに、大西洋に直接的には接していない諸地域も対象に組み入れて、各地域経済の関連性をみようとする動きが注目される。ドイツ史研究でも、少しずつそのような動向が現れている。こうした研究潮流をとらえ、論点を整理するために、研究史の整理が必要となる。近年の成果のみならず、20世紀前半の研究から掘り起こして動向を正確に捕捉する。

#### (2) 価格の分析

内陸地域の大西洋植民地物産市場の形成、すなわち内陸市場が大西洋経済に統合されていたか

どうかを測定するには、価格がもっとも適した指標となる。ドイツ地域における植民地物産の中心的窓口であり、ザクセン地方と密接な物流関係にあった貿易港ハンブルクの取引所では、18世紀に『価格表』が作成されており、一方でザクセン地方の物流中心地であったライプツィヒでは、大市の際に価格の報告書が作成された。両者を比較することで、植民地物産市場としてのザクセン地方の位置づけが正確に評価できる。

#### (3) 物流と市場取引の分析

上述した貿易港ハンブルクとザクセン地方都市との間の物流において、植民地物産がどれほどの割合を占めていたのかを測定する。また、ザクセン地方都市の市場において、植民地物産の取引(卸売り)がどれほどの割合を占めていたのかを測定する。貿易量や大市取引の報告などの史料を利用する。

#### (4) 市場制度の分析

ハンブルクやザクセン地方都市において、市場制度の変化が植民地物産の消費にどのような影響を与えたのかを調査する。また、市場制度が変更される際に何がインセンティブとなったのかも考慮する。都市当局や領邦君主による市場関連の布令・条令に加え、住民からの要望書等が主な検討対象となる。

### 4. 研究成果

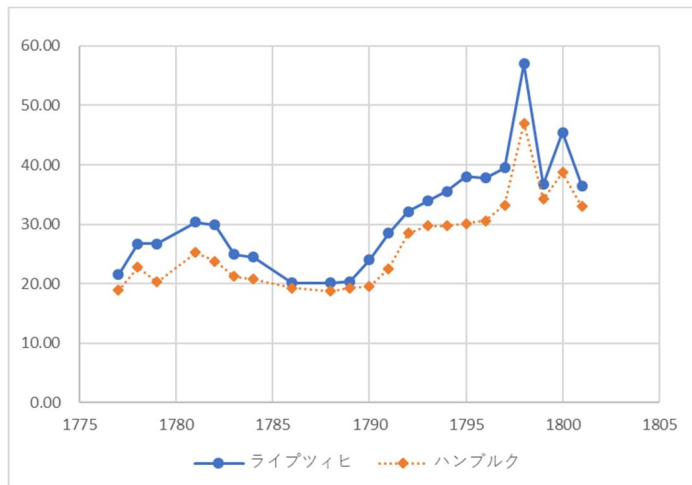
以下では、上述した「3. 研究の方法」の整理番号(1)~(4)に対応させて研究成果をまとめる。

(1)「大西洋経済史」と「ドイツ経済史」というキーワードから先行研究をフォローしたところ、当該テーマの研究動向は、①消費、②商人という観点から進展していることが判明した。

①経済史研究において、消費(需要)サイドからのアプローチの重要性はかねてより指摘されてきた。研究の主流を成したのはイギリス経済史であった。当初は国内製造業との関連から議論が進められたが、のちにはさらに、大西洋貿易との関係が注目されるようになった。ドイツ史研究はその動きからやや乗り遅れはしたが、経済成長論、制度論、プロト工業化論、勤勉革命論などに関連させて、大西洋植民地物産やアジア物産の消費が18世紀頃にどれほど普及していったのかに関心が寄せられるようになった。一方で、それを直接・具体的に示す実証的な研究は少ない。以上の研究動向は、「近世ドイツと大西洋経済 消費史アプローチからの序説的考察」というタイトルで『中央大学商学論纂』に論文としてまとめている。

②ドイツ地域と大西洋経済の関係は、研究史において十分に注目されてこなかったが、近年では、とくに商人史研究から進展していることが明らかになった。研究史をたどると、20世紀前半までは、ドイツの対外拡張という政治的イデオロギーと一体になって、ドイツ人の大西洋・アジア地域への進出が過度に称揚されていた。戦後はその反動から、これを過小評価する傾向がみられた。近年の研究は、そうした偏重から自由になりつつあり、グローバルな経済関係の担い手としてドイツ商人が再評価されるようになった。とりわけ内陸地域の商人の大西洋経済圏での活動が注目されている。一方、このような近年の研究では、ドイツ商人が外部に向けて展開していく側面に関心が偏ってきた。今後はその視線を逆に向け、内陸地域内で海外物産が普及していくプロセスを明らかにするために、商人研究というミクロなアプローチをする必要があることが判明した。以上の動向研究は、2020年の『経営史学』55巻1号に掲載される予定である。

(2)ハンブルクの『価格表』と、ライプツィヒの『大市報告書』の情報をもとに、貨幣単位や度量衡の差異を加味して両都市における砂糖価格の比較を行った結果、ザクセン地方、少なくともライプツィヒは、18世紀後半には大西洋経済圏との市場統合がかなりの程度進展しており、重要な植民地物産市場が形成されていたことが判明した。以下に述べる検出データがその論拠



である。第一に、両都市での価格差の小ささが挙げられる。輸送コストなどの影響によって、内陸都市ライプツィヒにおける砂糖価格は、輸入貿易港ハンブルクよりも常に高かったが、その価格差は平均して17パーセントであった。これは、輸送技術とインフラが未発達な前近代にあって、しかも多くの関税障壁や輸送制限があり得た当時のドイツ地域にあって、かなり低い数値であったと評価できる。さらに注目すべきは、両都市の価格変動が相当程度に相関していた。数値が得られた時期の相関係数は0.98であった。

図2:ライプツィヒとハンブルクの砂糖価格 1777~1801年(1ポンド当たり,単位:グロート)

この成果はまだ公表されていないが、きわめて重要な結果であるため、英語論文として発表する予定である。

(3) ハンブルクとザクセン地方の中心都市ドレスデンの間でエルベ川を經由して行われた商品輸送を示す史料を入手し、分析した。その結果、ハンブルクからは植民地物産、とりわけ砂糖の輸出が多くの割合を占めていたことが判明した。1737年から1746年に、ハンブルクからの総輸出額約28万ターラーのうち、「砂糖、コメ、干しブドウ」が5万9171ターラー、液糖が1万9623ターラーを占めていた。

さらに、1765年のライプツィヒ大市における全商品取引額の内訳を分析したところ、ここでも植民地物産が占める割合が高いことが検出された。総取引額917万5600ターラーのうち、砂糖が65万9000ターラー、コーヒーが31万8000ターラー、タバコが22万6000ターラーであった。商品流通面でも、ザクセン地方における植民地物産市場の形成が明らかにされたといえる。これらの結果については、一部はドイツ語書籍(Yuta Kikuchi, Hamburgs Ostsee- und Mitteleuropahandel. Warendistribution und Hinterlandnetzwerke, Böhlau, 2018)で発表してある。その他は、上述(2)で述べた英語論文に反映させる予定である。

(4) 大西洋植民地を実質上もたなかったドイツ地域が植民地物産にアクセスするためには、植民地保有国からの輸入が必要である。その主要な担い手は、当該諸国出身の商人であった。そのため、植民地物産輸入貿易の拡大のためには、植民地保有国出身の外来商人の市場での活動を受容し、促進する必要がある。しかし、そのような市場の開放は、在地商人の反発を招く。そのため、在地商人の利害にも配慮した市場の制度変更が必要になる。その具体的プロセスを、植民地物産中心輸入港ハンブルクを例に明らかにした。ハンブルクでは、外来商人の受容に対して在地商人から強い反対の動きが出された。しかし、都市政府は受け入れ政策を推進していく。従来はその背景として、政府が都市の経済的・財政的な利益を追求したためという説明がなされてきた。本研究は、市場制度変更のインセンティブとして新たな側面を浮かび上がらせた。すなわち、ハンブルクの周辺には外来商人の受容により経済拡大を目指す競合都市が存在しており、ハンブルク市当局はそれを強く懸念していた。このような都市間競合がインセンティブとなって、外来商人の受け入れが推進されたのである。

市場制度変更に対する在地商人への配慮として、在地商人にのみ取引が留保される商品が明確化された。その中心は、在地商人が伝統的に扱ってきた工業製品や、食糧、原材料などの必需品類であった。一方で外来商人には、外国製品を中心的に取り扱うように規定されていった。こうした調整によって、海外物産のドイツ地域への流入が促進されていったと考えられる。

以上の成果は、2020年刊行予定の『市場史研究』に論文として掲載されることが決定している。内陸ザクセン地方については、コーヒーなどの輸入植民地物産の消費の拡大に対し、たとえば新たな飲料類としての競合を危惧したビール醸造業者が反対をした。ザクセン政府も輸入を規制する政策を打ち出していく。それでも植民地物産の浸透は農村部にまで浸透していった。このことについては、上述4.(1)①の論文「近世ドイツと大西洋経済 消費史アプローチからの序説的考察」にある程度まとめてあるが、分析済みの一次史料に基づいた本格的な論述は今後の課題として残された。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 菊池雄太	4. 巻 55-1
2. 論文標題 大西洋経済の中の近世・近代初期ドイツ史 商人研究の進展	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 経営史学	6. 最初と最後の頁 28-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊池雄太	4. 巻
2. 論文標題 近世ハンブルクにおける外来商人の受容と市場の秩序の変化 - エルベ川下流域における「都市間競合」との関連 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 市場史研究	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊池雄太	4. 巻 61-5・6
2. 論文標題 近世ドイツと大西洋経済 消費史アプローチからの序説的考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中央大学商学論纂	6. 最初と最後の頁 27-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 3件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 菊池雄太
2. 発表標題 近世ハンブルクの商業拡大と市場の制度・秩序 - エルベ川下流域における都市間競合と外来商人誘致との関連
3. 学会等名 市場史研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菊池雄太
2. 発表標題 ヨーロッパの中のドイツをめぐる - ドイツ経済史研究の一視座
3. 学会等名 立教大学学術研究大会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菊池雄太
2. 発表標題 北ドイツ都市と地域性のダイナミズム - ハンザの系譜と「北方性」
3. 学会等名 比較都市史研究会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Yuta Kikuchi	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Boehlau	5. 総ページ数 426
3. 書名 Hamburgs Ostsee- und Mitteleuropahandel 1600-1800. Warenaustausch und Hinterlandnetzwerke	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----